

塩田津における塩田石を用いた 歴史的街路景観デザインの試み

大瀬 花梨¹・工土くるみ²・樋口明彦³・榎本 碧⁴

¹学生会員 九州大学 景観研究室（〒819-0305 福岡県福岡市西区元岡 7 4 4）

E-mail:karin@doc.kyushu-u.ac.jp

²正会員 建設技術研究所（〒810-0041 福岡県福岡市中央区大名 2 丁目 4-1 2 C T I 福岡ビル）

E-mail:krm-kushi@ctie.co.jp

³正会員 九州大学 景観研究室（〒819-0305 福岡県福岡市西区元岡 7 4 4）

E-mail:higuchi@doc.kyushu-u.ac.jp

⁴正会員 九州大学 景観研究室（〒819-0305 福岡県福岡市西区元岡 7 4 4）

E-mail:midori@doc.kyushu-u.ac.jp

佐賀県嬉野市の塩田津重要伝統的建造物群保存地区は、河川改修や舟運の廃止などにより失われていた川港としての町並み景観は、地域住民を中心とした取り組みにより景観的に良い町並みが形成されつつあるが、町並み空間全体としてはまだ改善の余地がある。本論文では、塩田石を用いて、塩田宿線の道路を石舗装にすることの可能性について、塩田地区の石舗装の歴史的経緯、地域交通、地域住民への意識調査から明らかにする。交通規制を適用するという条件下では塩田宿線を、塩田石を使用した石舗装にすることは十分可能である。そのためには、石畳にするメリット・デメリットに対する住民の十分な理解が必要となる。

Key Words: Shiota, Landscape, stone, pedestrian, conservaiton

1. 背景と目的

佐賀県嬉野市に位置する塩田町には塩田川が流れており、有田焼に使用する陶土を天草から有田に運ぶなど、かつて川港として賑わいを見せていた。しかし、直線化が試みられた河川改修後、塩田川の河岸景観が失われて川港の役割を終えた。時を同じくして、塩田津の町並み空間も変化していき、伝統的な町並み景観は徐々に失われていった¹⁾。

塩田津の町並みの大半は居蔵造りで形成されている。町並みの景観が失われつつあったものの、居蔵家を主とする町屋はほとんど残されており、この町並みを活かしたまちづくりが可能であった²⁾。西岡家住宅が国の重要文化財に、杉光家が国の登録有形文化財に指定されたことを足がかりに、塩田津は平成 17（2007）年に伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）に指定された。10 周年を迎えた昨今は白壁の歴史を感じる建物が並び、景観的に良い町並みが形成されつつあるが、町並み空間全体としてはまだ改善の余地がある。

そのひとつが道路舗装である。現在の道路舗装は、大部分はアスファルト舗装であるが、昔の町並みに近づけるために、図 1 に示すようにカラーアスファルト舗装にしたり一部石畳舗装にしたり工夫をしている。しかし、アスファルトの色に違いがあるつぎはぎの部分がある等、景観に配慮されているとは言えない。そして歩道の幅員が狭く、左右の幅員も異なり、歩車分離ができていない。近辺を通る国道の抜け道として通行する車両が非常に多いので、住民は伝建地区には似つかわしくない交通量だと感じている。また近隣の保育園や高校の通学路だが、道路の見通しが良く車幅も広いためスピードを出す車両が多く、危険な状況である。

塩田宿線は、平成 27 年度から 3 年計画で道路の補修をすることを行政が決定した。現在の道路舗装は約 15 年前に施されたが、合意形成が十分でなく住民の意見が反映されなかった。

今回の改修では、市役所は戸別にアンケートを取り、住民が望む道路舗装に近づけるよう努力した。塩田津が目標とする大正時代は土舗装であったことから、今再現

することは難しいと判断し、アスファルト舗装にするというのが市役所の舗装案である。

一方、九州大学からは地元で採れる塩田石を使用した石畳舗装を提案した。設定時代とは異なっているが、観光客の目から見て町並み空間に石畳舗装が似つかわしいと思われることから、石畳舗装を取り入れている伝建地区は多い。

本論文では、塩田石を用いて、塩田宿線の道路を石畳舗装にすることの可能性について明らかにする。

2. 材料としていく塩田石の文化

道路舗装をどうするか検討していく中で、塩田石という地元で採れる石に出会った。塩田石は、神社の石段や参道や石造物、家の基礎など多くの場面で使われており、現在の塩田のたたずまいを形成している重要な要素である。今でも町家の基礎や軒先に使用されている塩田石は残っているが、コンクリートが使われるようになったことで次第に需要が減っていき、衰退してきた。需要と仕事が減少するに伴い石工の後継者も減少しており、塩田石文化は存続の危機にある。

塩田宿線の道路舗装をこの塩田石を用いて石畳舗装にすることは塩田に良い影響を与えと考えられる。現在、塩田石の石積みを用いて塩田津の川港部分の復興をしようとする動きが進んでいる。それに加えて伝建地区の道路舗装に塩田石を使用すると、膨大な量の塩田石と、人手が必要になる。また、今後このような公共事業の中で塩田石に安定的需要が出てくることから、衰退している塩田石文化の復興につながる事が期待できる。

3. 塩田宿線の交通量調査

まずは現況の交通量を数値化し、それを元に住民の意向に沿った塩田宿線に合う交通規制を導出する。

調査は住民の「平日朝夕の交通量が多く、平日日中や休日の交通量はさほど多くない」という印象を裏付けるため、月曜日、金曜日、日曜日の3日間7時から18時まで車両の台数とスピードに関する調査を行った。

調査結果として平日および休日の両方向の車両通過台数を図2に示す。これを見ると、朝方特に7時半から8時半、夕方特に16時から18時に交通量が他の時間帯と比較して多いことが読みとれる。休日の結果である図3のグラフからは朝夕にこのような傾向が見られなかったことから、これは通勤・通学の車両と関係していると考え



図1 現在のカラーアスファルト舗装

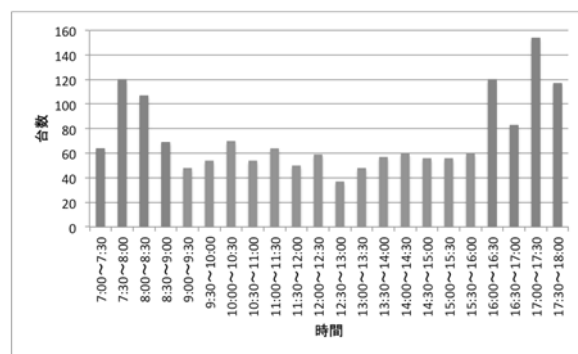


図2 2015年11月20日（金）の両方向の交通量

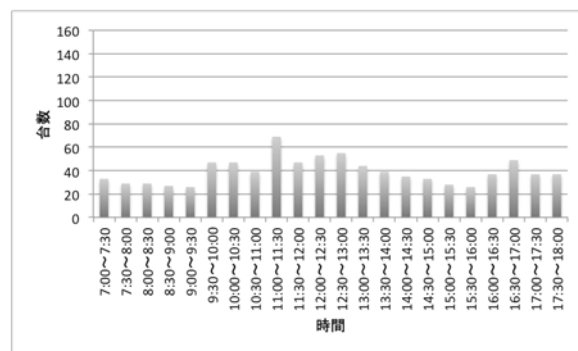


図3 2015年11月1日（日）の両方向の交通量

えられる。

調査結果から現在の塩田宿線は、地元の車両に加え通過交通量が多い。特に通勤時間の朝方と夕方の交通量は突出しており、通行する車の速度も速い。地元住民、観光客、通学の学生などの通行も多い中、歩行者にとって安全とは言い難い。この現況は安全な環境に改善する必要がある。

歩行者が安心して歩き回れる環境になることは、歴史的街路の整備にも利点になると考えられる。他の伝建地区では、一定時間内では歩行者と自転車通行のみに制限していたり、終日車両の進入は生活者のみにしていたり、

規制をかけて歩行者の安全に配慮して観光しやすい環境を作っている。また、現在の交通量が減少し、安全性が高まると石舗装を採用する可能性が出てくる。

4. 塩田石を用いた歴史的石畳舗装の事例調査

塩田町において、塩田石は特に寺社の参道の舗装として頻繁に使用されている。今日、塩田町内に存在する41件の寺社のうち16件で塩田石の石畳舗装を確認することができた。

これらの石畳舗装に使用されている塩田石の厚さや形状を調査し、それを参考に塩田宿線の石畳舗装にふさわしい舗装パターンを導出した。

調査結果から、基本的に縦横長方形で、縦横ともにさまざまな大きさがランダムに並んでいる舗装パターンが、16箇所中11箇所と最も多く見られた。横幅に関しては、バラツキはあるものの、おおよそ30cm前後のものがほとんどであった。例外はあるものの塩田石の参道舗装は、基本的に縦長の長方形を連ねる舗装パターンが一般的である。厚さは3cm～12cmのものが確認でき、10cm前後のものが主流と考えられる。

5. 石舗装に関する市民意識調査

(1) 石舗装デザイン案の作成

3. の調査結果から交通規制が適用できることを前提に塩田石を用いた石畳舗装のデザイン案を作成した。完成時のイメージ図として図6に示すように、4. で導出した石畳のパターンを元に既存の塩田石の石畳の画像を塩田宿線の町並み写真に合成した。また、舗装材として他に考えられる一般的なアスファルト舗装とコンクリート舗装もイメージ図を図7および図8に作成した。

(2) 調査結果

これらイメージ図に図5の現在のカラーアスファルト舗装を含めたもののうち、どれが将来の塩田宿線にふさわしいのか意見を伺うアンケート調査を行った。生活者の視点から住民と、来訪者の視点から九大学生を対象とした。

地域住民への回答者人数は102名、学生の回答者数は80名であった。回答結果を図9および図10に示す。

調査の結果、地域住民102名のうち、塩田宿線沿いまたは塩田町住民は89人でそのうち54人つまり61%が石舗装を選択している。また、カラーアスファルトまたはアスファルト舗装の回答が39人(38%)であった。生活道路のため、使いやすさを重視するとアスファルト舗

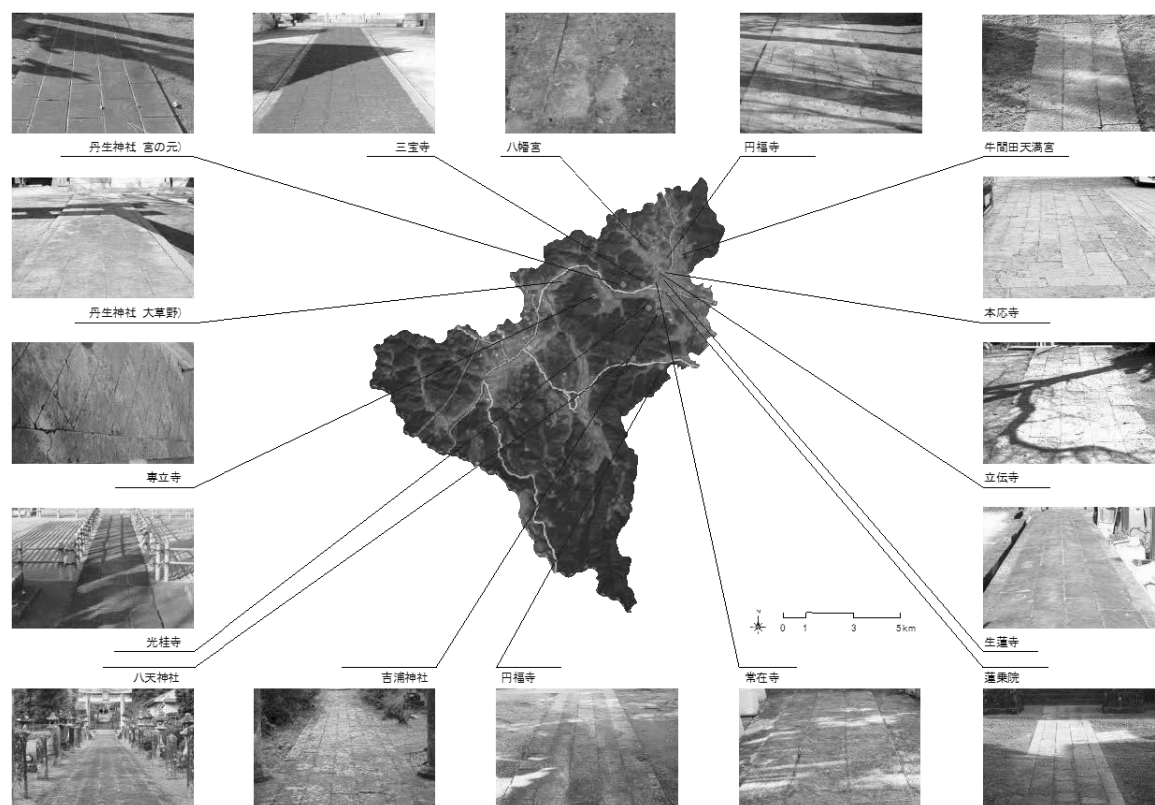


図4 塩田周辺の石舗装の調査結果

装が妥当だという意見だった。景観だけでなく生活しやすい舗装でなくては、住民にとって良い道路舗装とは言えないことも分かる。一方、学生の回答は現在のカラーアスファルト舗装が全体の 24%、B の石畳舗装が 76% であった。

6. 結論

交通規制を適用するという条件下では塩田宿線を、塩田石を使用した石畳舗装にすることは十分可能である。ただそのためには、石畳にするメリット・デメリットに対する住民の十分な理解が必要となる。

さらに、道路舗装や護岸整備に塩田石を使用していくことが決まれば、膨大な量の塩田石が必要になる。現在は動いていない塩田石の採石場を再び始動させることや、新たに山を切り開いて採石場を作ることも提案していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 佐賀県塩田町教育委員会：肥前塩田津,p.2-19,平成 16 年書店, 1962.
- 2) 日野ら：肥前塩田町における「居蔵家」の町並み形成, 日本建築学会研究報告. 九州支部. 3, 計画系 (43), pp.517-pp.520, 2004.3



図5 現在のカラーアスファルト舗装



図6 塩田石舗装



図7 アスファルト舗装



図8 コンクリート舗装

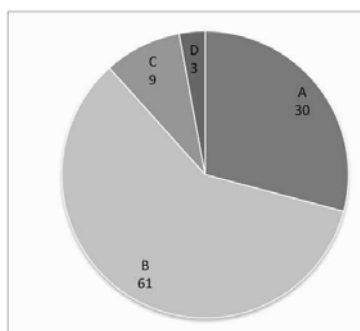


図9 地域住民のアンケート結果

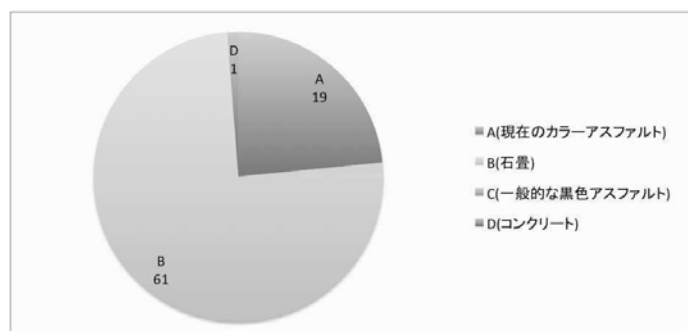


図10 学生のアンケート結果